

令和5年度 学力向上指導改善プラン

三田市立藍小学校長 水谷 裕司

学校教育目標		心豊かにたくましく 共に生きる児童の育成 ～大好き自分 大好き友だち 大好き藍～		4月		2～3月		
推進主体		校内研究推進委員会		学力向上に向けての重点的な目標		年度末評価		
学力に関する前年度の状況・経年の課題等				(指標となる数値等)	(成果目標達成のための具体的な手立て等)	(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	評価	
学 力 の 状 況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語・算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語	○全ての領域及び評価の観点において全国平均を上回った。特に「話すこと・聞くこと」の領域では、大きく上回った。 ◆「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」領域の記述式設問では、必要な情報をめき出し簡潔にまとめる力、大切な言葉を取り上げて表現する力、個々の知識や事実をつなぎ合わせ、推論したり解釈したりする力の弱さが見られた。 ◆「文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文書を整える」設問では、文章の全体構成、構成要素(内容)の理解が難しかったり、文章の内容や構成への意識が弱かったりすることの課題が見られた。	○全国学力・学習状況調査の誤答分析を生かした授業改善を、全教科で進める。 ○ICT機器を効果的に活用した授業を進める。	○国語、算数における記述問題の正答率を昨年度実績を上回るようにする。 ○昨年度よりも無回答率を下げる。	○1時間の授業の中に、子どもが思考する過程を意図的に組み込む。 ○自分の考えや意見を書く学習活動を積極的に取り入れる。 ○全教員での全児童の誤答分析から、思考の過程での立式の意味、計算で出された数値の意味を考える力の不足等の課題を抽出し、分析後作成した授業評価シートを基に組織的に授業改善を進める。 ○協働学習におけるICTの活用方法を模索し、学習における対話活動の充実を図る。 ○ミライシードを活用した協働的な学習をさらに進めていく。(中学年以上) ○タブレット端末を活用し自ら情報や資料を集め、必要かつ適切な情報を選択する授業の充実を図る。 ○児童が自己調整しながら学習が進められるよう、デジタル教科書の効果的な活用方法を探る。 ○子どもたちが、ICT機器を思考ツールの一つとして活用しながら考えを深めていくことができるようにする。	○「読むこと」領域の「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける」設問の正答率が、全国平均より大きく上回っている。 ◆記述式の設問の平均正答率が全国平均を下回っている。また、記述式の設問に対して無回答率が高く、記述式の設問に対して課題が見られた。	B
		算数・数学	◆全体として全国平均を少し下回った。特に「図形」領域で、「変化の関係」領域で大きく全国平均を下回った。(経年) ○設問16問中11問が無回答率0%、5問が無回答者1名と、粘り強く問題に取り組もうとする「学びに向かう力」が育ちつつあることがわかった。				○「図形」領域の設問は、全項目で正答率が全国平均を上回っている。 ◆求め方を説明するにあたって、問題の中にある情報を整理することに課題がある。 ◆理由を説明する設問で、条件が抜けており、不十分な説明になっている誤答があり、問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある。	B
		ICT機器を効果的に活用した取組状況		○「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う」児童は100%で、約90%の児童は「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を使用した」となっていることから、授業中ICTをよく活用できている。				○「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う」児童は100%で、ICT機器が便利だと感じている。また、「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を週1回以上使用した」と答えた児童が100%であった。
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)		○「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」児童は約90%で、「学習した内容について、分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」児童は100%であることから、授業中、意欲的に学習し、集団としての学びの場となる環境が整っている。	○問題解決型の授業構成を中心とした探究の過程と対話活動を大切に授業改善	○質問紙調査の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の肯定評価で、昨年度の実績を上回る。	○一斉指導中心ではなく、対話を重視した、協働学習中心の授業改善を図る。 ○授業公開、授業参観を活性化し、互いに高め合える職員集団を作る。	◆「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」児童が、昨年度よりも若干下がっている。	B
	授業等からうかがえる状況(各教科)		◆タブレット端末を積極的に使い調べ学習に活用しようとする姿がみられるものの、たくさんの情報の中から必要な情報や適切な情報を選択できていないことも多い。				○算数科を中心とした校内研究において、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることができた。	A
学 力 向 上 に 関 連 する 学 習 の 状 況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		◆「読書が好き」な児童は約80%であるが、「1日当たりの読書時間」は10分未満の児童が約70%である。	○読書活動の量・質の向上	○昨年度の実績である、貸し出しは低：平均80冊以上、中：平均50冊以上を上回ることを目指す。	○全校一斉読書タイムの充実を図る。 ○図書室やICTを活用した調べ学習の実施。 ○学校司書を中心に、調べ学習における図書室の活用を図る。	○「読書が好き」な児童が増加し、「1日当たりの読書時間」が10分未満の児童が大幅に減少している。これは今年度より週1回実施している読書タイムの成果であると考えられる。	A
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		◆「進んで本を読んでいる」の設問の肯定的評価が下がっている(経年)				○「自分から進んで学習している。」では、肯定的評価が昨年度に比べて増加している。 ◆「授業は楽しい。」の肯定的評価が昨年度に比べて減少している。	B
校 内 研 究 ・ 研 修 の 状 況	校内研究の状況		◆全国学力・学習状況調査の誤答分析を通して授業改善の方向性を導き出し、国語・算数の授業改善シートを作成することができたが、このシートの積極的な活用や他教科へ汎化していくことに課題がある。(経年)	○1時間(45分)の授業の中で発揮される「学びの力(子どもの問い)を大切に授業づくり	○年間3回程度の公開研究授業を実施する。 ○ICT機器を活用した授業実践を行う。	○すべての教科・領域の学習において「自分の考えを持つ」ことを重視した学習活動を行う。 ○「もしかしたら」「だぶん」といった曖昧な考えであっても、「まずは書いてみる、やってみる」といった経験を積み重ねていく。 ○子どもの「疑問」や、自分の生活経験とのズレから生まれた「驚き」などを取りあげ話題にすることで、子どもが主体的に学んでいけるようにする。(学びに向かう力の向上) ○特別支援教育の視点を取り入れた授業設計を行うことで、個別最適な学び(指導の個別化、学習の個性化)を図る。	○年間3回の公開研究授業と各学団による校内研究授業を実施し、子どもたちが主体的に学んでいける問題提示の仕方や必要な支援について共通理解できた。	A
	校内研修の状況		◆ICT機器を利用した児童一人ひとりに個別最適化された学びのための、教師の指導スキル、児童の活用スキルの習得がいっそう求められる。 ◆教科における個々の児童の学びの困難さに対応できる教師の指導力向上が求められる。	○研究授業や、全国学力・学習状況調査の誤答分析から得られた学びを、他教科に広げていく。			○タブレットを使って、校内研究授業の事後研修会を実施したことで、教師のICT機器の活用スキルの向上につながった。 ◆教師によってICT機器の指導スキルに差が見られた。校内での研修には限りがあるので、自己研鑽が必要だと感じられた。	B
家 庭 ・ 校 種 間 連 携	家庭・地域等の状況		◆「家で、自分で計画を立てて勉強している」児童は約40%、「平日、休日ともに授業以外の学習時間」が1時間未満の児童は約70%である。家庭学習が、計画的に行うことができていないため、学力が定着しにくいと考えられる。 ◆「今住んでいる地域行事に参加している」児童は約70%であるが、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」児童は約20%である。	○家庭における学習習慣の確立	○生活アンケートの「宿題は毎日やっている」という回答を80%以上にする。 ○生活アンケートの「自分で学校へ行く用意をしている」という回答を90%以上にする。	○地域コーディネーターと連携し、コミュニティスクールの活動を充実させ、フィールドワーク等を行う。 ○地域人材を活用した「放課後がんばりタイム」での学びを充実させる。	○「家で、自分で計画を立てて勉強している」児童は昨年度よりも大きく上回っている。 ○「今住んでいる地域行事に参加している」児童は昨年度と変わらないが、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」児童が大幅に増加し、地域や社会をよくしたいと思っている児童が多い。	B
	小・中における教科連携等の状況		○SC・SSWと連携し、合同研修や授業実践を進めたことで、児童が落ち着いて学習できるようになってきている。 ○同一中学校区の小学校と連携し、新教育課程に対応したプログラミング学習を同時期、同内容で進めるなど、中学校進学に向けた連携が図られた。 ○同一敷地内の幼稚園の教育資源を見直し、幼小教育課程の連携による新たな教育プログラム開発を進め、円滑な接続が図られた。	○小中学校生活の9年間を見通した学力をつける。	○中学校区共通の目標を設定する。	○中学校卒業時の進路指導を見据えて、自己実現や未来を切り開く力を育てるキャリア教育を行う。 ○中学校区での連携連絡会を開催する。 ○三校研の充実を図り、目指す子ども像を共有する。	○SC・SSWと連携することで、児童が落ち着いて学習できるようになってきている。 ○同一中学校区の小学校と連携し、新教育課程に対応したプログラミング学習を同時期、同内容で進めるなど、中学校進学に向けた連携が図られている。	B